

アカマツ林とお付き合い

「アカマツは日当たりのいい乾燥地が好きだ」と言われることもありますが、尾根筋や崖地などの乾燥地だけでなく湿原にも生えるので、あまり正確な表現ではありません。アカマツは貧栄養でほかの樹木が生えないような土地に生えるのです。日光を十分に受けないと成長できない陽樹なので、肥沃な土地では他の植物の日陰になって育つことが出来なくなるのです。アカマツは「競争相手になる植物が生えないようなきびしい環境に耐えて生きている」のです。

人間が伐採や火入れを繰り返した山は荒廃してやせ地になりますが、アカマツにとっては競争相手の少ない「絶好」の環境です。およそ 2000 年前に農耕が広まり山林に人の手が入ることで、アカマツ林が広がってきたと言われます。関西では、森林伐採の後に土壌条件のいい土地にはコナラ林、悪い土地にはアカマツ林が育つことが多いのですが、このように人間の影響の加わった植生を、「自然植生」に対して「代償植生 (Secondary Vegetation)」と呼びます。その後も、燃料や肥料を得るための伐採や下刈りや地掻きなどによって、乾燥して貧栄養な環境が維持され、アカマツ林が持続しました。

植物にとって過酷な土地でアカマツが生きる助けをしているのがマツタケです。マツタケはカビの仲間で、アカマツの細根に感染して糖類をもらう代わりに、根が土壌中のミネラル類を吸収する手助けをし、土壌微生物の攻撃や乾燥から根を守るのです。マツタケ菌も他のキノコ類や細菌との競争に弱いので、乾燥した貧栄養の土地でしか生きてゆけません。肥沃な土地では他のキノコに負けるのです。我慢強い、似た者同士がきびしい環境で共生しているのです。

アカマツ林を元気にしてマツタケ山を再生するためには、貧栄養の環境に戻すために、下刈りをして地掻き（落ち葉掻き）をしなければなりません。近年は温暖化の影響で山が乾燥しすぎているという指摘もあります。中低木を適度に残して、日陰を作り、極度の乾燥を防がなければなりません。昔のアカマツ林に戻そうと言って、一気に下刈りや地掻きをすると、もともとあったマツタケ菌をダメにします。



<地掻きをする様子>

元気プロジェクトでは、①「松くい虫」で枯れたアカマツを伐採・撤去し、被害の拡大を防ぐ ②アカマツに日陰を作るソヨゴなどの常緑広葉樹の高木を伐採する ③乾燥状態を見ながら 2, 3 年かけて下刈りや地掻きをする、などの作業を続けています。まだまだ未熟で分からないことが多いのですが、気持ちのいい森が出来ることを励みにしながら、試行錯誤をしています。

参考文献

「日本の植生図鑑（1）森林」（中西哲など、保育社）

「マツとマツ枯れに関する質問と回答」森林総合研究所四国支所のホームページ

「まつたけ十字軍運動ニュース」のホームページ